

幼児の仲間関係に関する研究：自由遊び場面の仲間相互作用とソシオメトリック地位

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成11年10月21日受理)

A study of peer relations in young children : Peer interactions in free play situations and sociometric status

Kenichi MAEDA

子どもは学校や幼稚園・保育園の集団生活の中で、日常的に仲間との相互作用を経験している。遊びや活動の文脈の中で、ある子どもが他の仲間に対して示す言動は仲間関係を促進したり、逆に仲間関係の形成を妨害したりする。その意味で、子どもが仲間に対してどのような社会的行動を示すかは、その子どもの仲間関係の形成や維持にとって重要な要因である。仲間に対する社会的行動は、それが肯定的・協調的であるか否定的・嫌悪的であるかに応じて、仲間受容から仲間拒否までの次元に沿って仲間から評価を受ける。子どもの仲間関係に関する多くの研究は、この仲間評価を集約した指標として、ソシオメトリック法に基づく社会的地位を利用してきた (Hughes, 1990 ; Hymel & Rubin, 1985 ; McConnell & Odom, 1986)。

ソシオメトリック法は指名法、評定法、一対比較法に大別されるが、よく使用されてきたのは指名法と評定法である。指名法では遊びたい人や一緒に作業したい人などの特定の選択基準に従って、通常は3～5名の仲間を指名させる。指名法では、さらに一緒に遊びたい人を指名させる肯定的指名、一緒に遊びたくない人を指名させる否定的指名とに大別される。仲間全員から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計し、学級単位または男女別に標準得点へ変換して肯定的指名得点や否定的指名得点を算出することが多い。従来の研究では肯定的指名得点と否定的指名得点の相関値を求めると、必ずしも高い負相関を示さないことが実証されている (Hughes, 1990 ; Hymel & Rubin, 1985 ; McConnell & Odom, 1986)。このことは、仲間から好かれる理由や行動特徴が仲間から拒否されやすい理由や行動特徴とは異なることを示唆する。他方、評定法は仲間一人ひとりについて、一緒に遊びたいと思う程度を3段階または5段階で子どもに評定させる方法である。評定法では、各子どもが仲間全員から受けた評定値の平均値 (平均評定値) を算出する場合が多い。この平均評定値は、仲間からの受容度を表す一次元の指標であると考えられている。

指名得点や平均評定値は、あくまで仲間集団の中で各子どもが仲間からどの程度人気があるか、あるいは受容されているかを表す相対的な地位得点である。しかし、これらの得点は仲間集団の中で子どもが受容され、適応している状態を表す1つの指標として有効であることが立証されている（たとえば、Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; Gresham, 1981; Hymel & Rubin, 1985; Rubin & Coplan, 1992）。特に、2次元分類システムの開発以降に実施された研究では、2つの指名得点を組み合わせて人気児、拒否児、無視児、両端児、平均児の5つの社会的地位タイプを分類して比較し、これらの地位タイプ間には攻撃的行動、向社会的行動、引っ込み思案行動などに差異があることを実証している（Coie & Dodge, 1988; 前田, 1995a, 1995b, 1998; 前田・片岡, 1993; Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993; Rubin & Coplan, 1992）。たとえば、Coie & Dodge (1988) は小1と小3の男子302名を人気児、拒否児、無視児、両端児、平均児に分類し、彼らの授業時間、昼食時間、遊び時間などの行動を観察した。その結果、授業場面の課題不適切行動では拒否児と両端児が平均児よりも有意に高かった。向社会的遊び行動では両端児が平均児よりも有意に高く、独り遊びでは無視児が平均児よりも有意に高かった。また、遊び場面の攻撃行動では両端児が平均児よりも有意に高かった。さらに、遊び場面における教師からの否定的相互作用では両端児と拒否児が平均児よりも有意に高かった。このように子どもの行動を観察した研究によると、一般に人気児は好意的・協調的な仲間相互作用を多く示すのに対して、拒否児は攻撃的・妨害的な仲間相互作用を示しやすく、無視児では仲間相互作用それ自体が少ないのである。

しかし、最近の研究では拒否児のすべてが攻撃的行動を示すとは限らず、拒否児の中でも攻撃的な拒否児が非攻撃的な拒否児よりも、多様で深刻な行動問題や適応問題をもつことを見出している（Bierman, Smoot, & Aumiller, 1993; 前田, 1995a; Parkhurst & Asher, 1992; Patterson, Kupersmidt, & Griesler, 1990）。これらの研究は拒否児タイプをさらに下位タイプに分類する方向へと進めて、拒否児にもさらに個人差があることを実証したものと見える。しかし、現実の仲間相互作用場面を考慮すると、人気児は誰に対しても肯定的な仲間相互作用を示し、拒否児は誰に対しても否定的な仲間相互作用を示しているとは限らない。つまり、仲間から拒否されやすい拒否児でも、自分の友人と非友人に対しては異なる社会的行動を示し、異なる仲間相互作用を経験しているのではないかと考えられる。本研究では、この点に着目し、各地位タイプの子どもが仲間の誰と実際に相互作用しているのか、相互作用している相手は肯定的指名で選んだ相手に限られるのかなどについて観察を通して検討する。

Greenwood, Walker, Todd, & Hops (1979) は3歳～7歳の子どもの仲間相互作用場面（自由遊び場面と課題作業場面）を観察し、ソシオメトリック指名法の肯定的指名で選んだ相手の仲間と実際にどの程度相互作用しているかを確かめている。彼らは、子どもが実際に相互作用していた3名の仲間群、肯定的指名で選んだ3名の仲間群、仲間の中からランダムに選出した3名の仲間群の3群を構成して、各子どもの相互作用全体に占める比率を比較している。その結果、自由遊び場面でも課題作業場面でも、実際に相互作用していた仲間群との相互作用率（50%～66%）は、肯定的指名で選んだ仲間群との相互作用率（29%～30%）よりも有意に高いこと、これら2群はランダム選出の仲間群との相互作用率（15%～16%）よりも有意に高いことを見出している。この結果から、彼らは実際に相互作用している仲間と肯定的指名で選んだ仲間とは必ずしも一致しないと考察している。しかし、この研究では実際に相互作用していた仲間の中に、肯定的指名で選んだ仲間が何名か含まれていた可能性がある。本研究では、

子どもが相互作用した仲間を重複しないように分類して、重複の可能性を排除する。

Hayvren & Hymel (1984) は3歳～5歳の幼児15名の仲間相互作用を観察し、肯定的指名で選んだ仲間群（A群）と否定的指名で選んだ仲間群（B群）のどちらとより多く相互作用しているかを比較した。その結果、仲間に対する肯定的・ニュートラルな相互作用の開始数ではA群がB群よりも有意に多く、仲間から受けた肯定的・ニュートラルな相互作用の応答反応数でもA群がB群よりも有意に多かった。しかし、否定的な相互作用の開始数や仲間からの応答数では、両群間に有意差は見られなかった。この研究結果は特定の1学級15名の幼児を対象にして得られた結果であり、幼児一人ひとりの特徴だけでなく、学級全体の雰囲気や凝集性などに強く影響されている可能性がある。本研究では、彼らの結果の一般性を確かめる意味で、幼児数を63名に増やし、学級数を2学級に拡大した。

本研究では、各子どもが実際に相互作用している仲間を、ソシオメトリック指名法の肯定的指名で選んだ仲間（肯定的指名仲間：A群）、否定的指名で選んだ仲間（肯定的指名仲間：B群）、肯定的指名でも否定的指名でも選ばなかった仲間（その他の仲間：C群）の3群に分類した。さらに、仲間がソシオメトリック指名法で対象児を選んだ場合に基づいて、肯定的指名で対象児を選んだ仲間（肯定的指名者：D群）、否定的指名で対象児を選んだ仲間（否定的指名者：E群）、肯定的指名でも否定的指名でも対象児を選ばなかった仲間（その他の者：F群）の3群に仲間を分類した。本研究の主な目的は、ソシオメトリック指名法に基づいて分類した地位タイプの中から、人気児、拒否児、無視児、平均児の4地位タイプを選出し、彼らの実際の仲間相互作用がABCの3群間およびDEFの3群間でどのように異なるのかを検討することである。

方 法

対 象 児 対象児は愛媛大学教育学部附属幼稚園の年長児63名であった。男女の内訳は表1に示すとおりである。彼らの平均年齢と年齢範囲は6歳1か月（5歳7か月～6歳6か月）であった。

実施時期 写真ソシオメトリック指名法と評定法は1998年10月2日～11月

6日にかけて実施した。自由遊び場面における幼児の仲間遊び相互作用に関する観察は、1998年10月20日～10月31日にかけて実施した。

材 料 写真ソシオメトリック指名法と評定法では、各幼児の個別カラー写真を使用した。写真は1人で壁を背に立っている姿を正面から撮影し、胸から上の部分を縦5.5cm×横4.5cmの大きさにプリントしたものであった。各幼児の写真を縦7cm×横5cmの白色厚紙に貼りつけて個別写真カードを作成した。また、写真ソシオメトリック評定法では3つの分類箱を使用した。各箱は底面積が12cm×12cm、3つの側面の高さが5cm、残り一側面の高さが12cmの蓋のない容器形であった。各箱には高さ12cmの側面の内側面にそれぞれ3色の画用紙に描いたハッピーな顔（ピンク色）、ニュートラルな顔（黄色）、悲しそうな顔（青色）の表情略線画を貼り

表1 対象児の地位タイプ分類の人数内訳と分類基準

地位タイプ	分 類 基 準	男	女	計
人 気 児	$SP > 1, L > 0, D < 0$	9	6	15
拒 否 児	$SP < -1, L < 0, D > 0$	10	6	16
平 均 児	$-1 < SP < 1, -1 < SI < 1$	11	10	21
無 視 児	$SI < -1, L < 0, D < 0$	4	5	9
両 端 児	$SI > 1, L > 0, D > 0$	2	0	2
計		36	27	63

つけてあった。

手 続 き 写真ソシオメトリック指名法と評定法は、個別に次の順序で実施した。

(1) 写真ソシオメトリック指名法：対象児を除く同性仲間全員の写真カードを机上にランダムに縦4枚×横4枚に配列し、次の教示を与えて肯定的指名を3名まで選ばせた。「この中で、〇〇ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番（2番目に、3番目に）一緒に遊びたい子は誰ですか？」肯定的指名が終了した後、同様の手順で次の質問をしながら、否定的指名を3名まで選ばせた。「今度は、この中から〇〇ちゃんが幼稚園で遊ぶとき、1番（2番目に、3番目に）一緒に遊びたくない子は誰ですか？」

(2) 写真ソシオメトリック評定法：まず机上に3つの分類箱を横一列に配置した。対象児から見て、右側にハッピーな顔の箱、左側に悲しそうな顔の箱、中央にニュートラルな顔の箱を置いた。ニュートラルな顔の箱を中央に置いた方が分類しやすいと考え、どの対象児にも箱の提示位置を一定にした。対象児を除く仲間全員の写真カードをランダムな順に束ねた後、次の教示を与えて写真カードを1枚ずつ対象児に手渡していった。「今度は△△組のお友達の写真を1枚ずつ〇〇ちゃんに渡します。〇〇ちゃんは、写真のお友達をよく見て、〇〇ちゃんが幼稚園で一緒に遊びたい子だなと思ったら、この箱（ハッピーな顔の箱）に入れて下さい。遊びたくない子だなと思ったら、この箱（悲しそうな顔の箱）に入れて下さい。遊びたいか遊びたくないかわからないなと思ったら、この箱（ニュートラルな顔の箱）に入れて下さい。それでは、この写真の子はどの箱に入れますか？」

(3) 仲間遊び相互作用の観察：自由遊び場面において、幼児が仲間と一緒に遊んでいるところを中心にして対象児1人当たり1回5分間ずつ観察した。観察では、遊びや仲間とのやりとりの時間経過に従って、対象児や周辺の仲間の行動および会話を筆録した。対象児1人当たり5分間の観察を3回ずつ合計15分間観察した。観察にあたっては、1人5分間の観察（1回目）を63名分終了してから、2回目の観察を63名分行い、最後に3回目の観察を63名分行うという手順で実施した。

得点化の方法 (1) ソシオメトリック指名法の得点：まず対象児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。肯定的指名数と否定的指名数のそれぞれの合計数について本人を除くクラスの同性仲間数で除算し、仲間1人当たりからの指名数を算出した。その後、男女別に2クラス全体の平均値とSDに基づいて標準得点へ変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（ $SP=L-D$ ）と社会的影響力得点（ $SI=L+D$ ）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を、D得点は仲間から積極的に拒否される程度を表す。SP得点は好かれる程度と拒否される程度の差を表し、SI得点は好かれるか拒否されるかにかかわらず仲間への影響力が強いことを表す。

(2) ソシオメトリック評定法の得点：対象児ごとに、仲間からハッピーな顔の箱に分類された場合に評定値3を、ニュートラルな顔の箱に分類された場合に評定値2を、悲しそうな顔の箱に分類された場合に評定値1を配点し、評定値の合計得点を求めた。この後、評定した仲間数で除算し、平均評定値を算出した。

(3) 仲間遊び相互作用の観察測度：対象児ごとに観察記録表を整理し、各対象児が一緒に遊んでいた仲間全員に対して1分間を単位として遊び交流得点を1点ずつ加点していった。ただし、対象児と仲間のかかわりが30秒間以内で終了した場合およびかかわりがない場合は0点と

した。遊び交流得点として1点を与える場合の定義には、対象児が仲間に対して言語的・身体的に直接かかわって一緒に遊んでいる場合はもちろんのこと、仲間に対する明確な働きかけや応答反応は見られなくても仲間との遊びの一部を構成していると思われる言動、あるいは物理的に離れていても心理的には仲間と一緒に遊びを継続していると思われる場合も含めることにした。たとえば、A君が袋を取りに行くために仲間と一緒に遊び場所から離れ、しばらくして袋を持って戻ってくる場面では、仲間との遊びが継続していたとして1分経過ごとに1点を与えた。したがって、対象児が同じ仲間と5分間ずっと一緒に遊んでいた場合には、その仲間の得点は5点となる。

地位タイプの分類方法と群構成 地位タイプの分類は Coie & Dodge (1988) の分類方法に従った。写真ソシオメトリック指名法の L 得点, D 得点, SP 得点, SI 得点に基づいて各対象児を5つの地位タイプのいずれかに分類した。表1は、各地位タイプの分類基準と分類結果の人数内訳を示したものである。人気児は多くの仲間から好かれ、拒否されることの少ない幼児たちである。拒否児は人気児と反対の傾向を示し、多くの仲間から拒否されやすい幼児たちである。平均児は好かれる程度も拒否される程度も平均的な幼児たちである。無視児は好かれることも拒否されることも少ない幼児たちである。本研究では、人数の少ない両端児を除いて人気児 (N=15)、拒否児 (N=16)、平均児 (N=21)、無視児 (N=9) の4群を構成して比較する。

結 果

地位タイプ間比較

図1～図6は、仲間遊び相互作用の各得点について、人数の少ない両端児 (N=2) を除く他の4つの地位タイプ別に平均値を図示したものである。地位タイプ間で平均値を比較するにあたって、分散等質性が保証される場合には各得点別に一要因分散分析を行い、その後で Duncan 法を使用して特定のタイプ間差を検定した。各群の分散が等しくない場合には各得点別に Welch 法による t 検定を使用して各タイプ間の比較を行い、その結果をまとめて報告する。

(1) ABC の仲間群別の得点

①交流合計得点：図1は、ソシオメトリック指名法において対象児が肯定的指名で選んだ相手の仲間（肯定的指名仲間：A 群）、否定的指名で選んだ相手の仲間（否定的指名仲間：B 群）および肯定的指名でも否定的指名でも対象児が選ばなかった仲間（その他の仲間：C 群）のそれぞれについて、対象児が自由遊び場面で交流した合計得点の地位タイプ別平均値を図示したものである。検定の結果、A 群との交流合計得点では4タイプ間に有意差は見られなかった。B 群との交流合計得点では平均児が拒否児よりも高い傾向にあった ($t=2.03$, $p<.10$)。C 群との交流合計得点でも4タイプ間に有意差はなかった。

また、対応のある t 検定を使用して各地位タイプ別に ABC の3群間比較をした結果、人気児では A 群と C 群が B 群よりも有意に高かった（順に $t=5.20$, $p<.001$; $t=6.17$, $p<.001$ ）。拒否児では C 群と A 群が B 群よりも有意に高かった（順に $t=4.21$, $p<.001$; $t=2.97$, $p<.01$ ）。平均児では C 群が A 群よりも高い傾向 ($t=1.73$, $p<.10$) にあり、B 群よりも有意に高かった ($t=4.63$, $p<.001$)。また、A 群が B 群よりも有意に高かった ($t=$

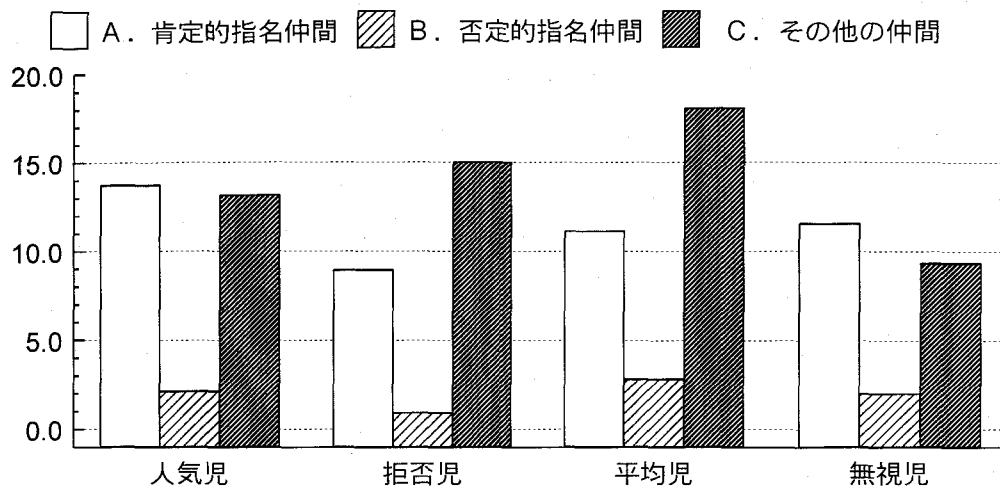


図1 ABCの仲間別の交流合計得点

5.43, $p < .001$). 無視児ではA群とC群がB群よりも有意に高かった (順に $t = 2.57$, $p < .05$; $t = 2.72$, $p < .05$).

②交流人数：図2は、図1と同様にABCの仲間群別に対象児が交流した仲間の人数について地位タイプ別の平均値を図示したものである。A群、B群、C群のいずれにおいても交流人数には4タイプ間に有意差がなかった。

また、各地位タイプ別にABCの3群間比較をした結果、人気児ではC群がA群よりも多い傾向 ($t = 1.99$, $p < .10$) にあり、B群よりも有意に多かった ($t = 7.86$, $p < .001$)。また、A群がB群よりも有意に多かった ($t = 5.00$, $p < .001$)。拒否児ではC群とA群がB群よりも有意に多かった (順に $t = 4.24$, $p < .001$; $t = 2.96$, $p < .01$)。平均児ではC群がA群とB群よりも有意に多かった (順に $t = 2.73$, $p < .02$; $t = 5.20$, $p < .001$)。また、A群がB群よりも有意に多かった ($t = 5.56$, $p < .001$)。無視児ではC群とA群がB群よりも有意に多かった (順に $t = 2.49$, $p < .05$; $t = 2.68$, $p < .05$)。

③交流平均得点：図3は、図2と同様にABCの仲間群別に、対象児が仲間1人当たりと交流した平均得点についてタイプ別の平均値を図示したものである。A群、B群、C群のい

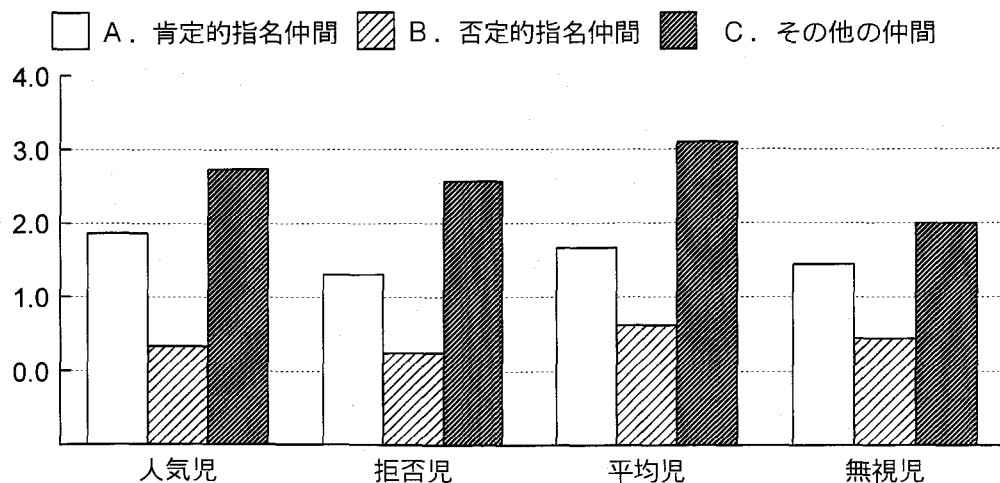


図2 ABCの仲間別の交流人数

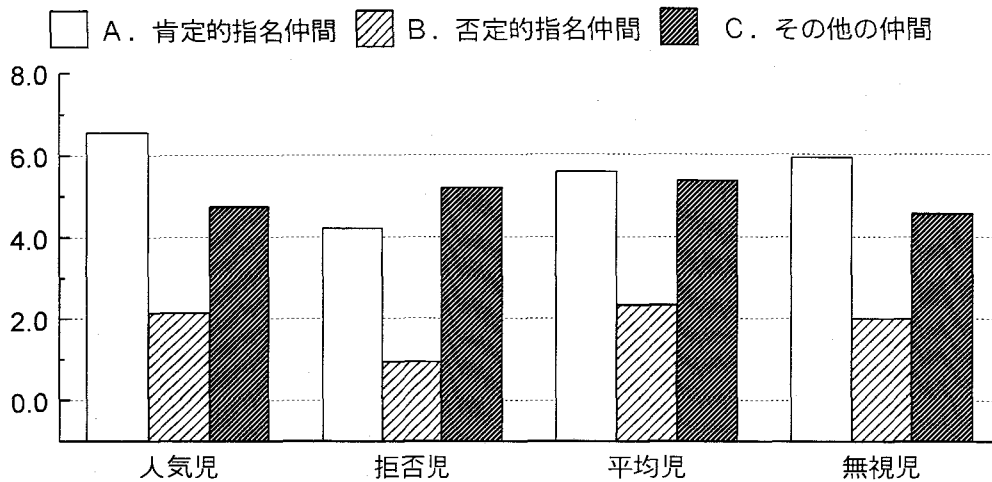


図3 ABCの仲間別の交流平均得点

れにおいても交流平均得点には4タイプ間に有意差がなかった。

また、各地位タイプ別にABCの3群間比較をした結果、人気児ではA群がC群よりも高い傾向 ($t=1.93, p<.10$) にあり、B群よりも有意に高かった ($t=5.47, p<.001$)。また、C群がB群よりも有意に高かった ($t=3.14, p<.01$)。拒否児ではC群とA群がB群よりも有意に高かった (順に $t=5.37, p<.001$; $t=2.73, p<.02$)。平均児ではA群とC群がB群よりも有意に高かった (順に $t=3.63, p<.002$; $t=4.22, p<.001$)。無視児ではA群がB群よりも有意に高かった ($t=2.38, p<.05$)。

(2) DEFの仲間群別の得点

①交流合計得点：図4は、ソシオメトリック指名法において対象児を肯定的指名で選んだ仲間（肯定的指名者：D群）、否定的指名で選んだ仲間（否定的指名者：E群）および肯定的指名でも否定的指名でも対象児を選ばなかった仲間（その他の者：F群）について、対象児が自由遊び場面で交流した合計得点の地位タイプ別平均値を図示したものである。検定の結果、D群との交流合計得点では人気児と平均児が無視児や拒否児よりも有意に高かった (順に $t=3.05, p<.01$; $t=5.94, p<.001$; $t=2.24, p<.05$; $t=4.89, p<.001$)。E群との交流合計

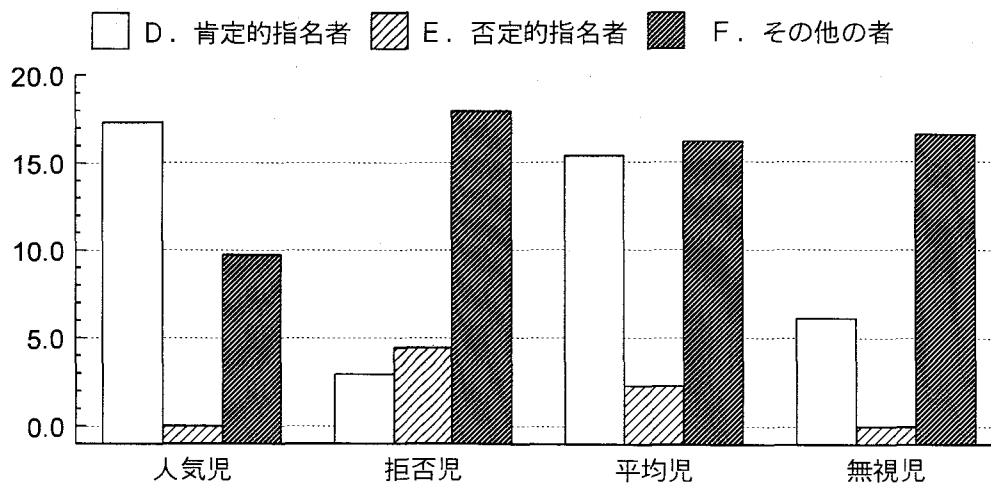


図4 DEFの仲間別の交流合計得点

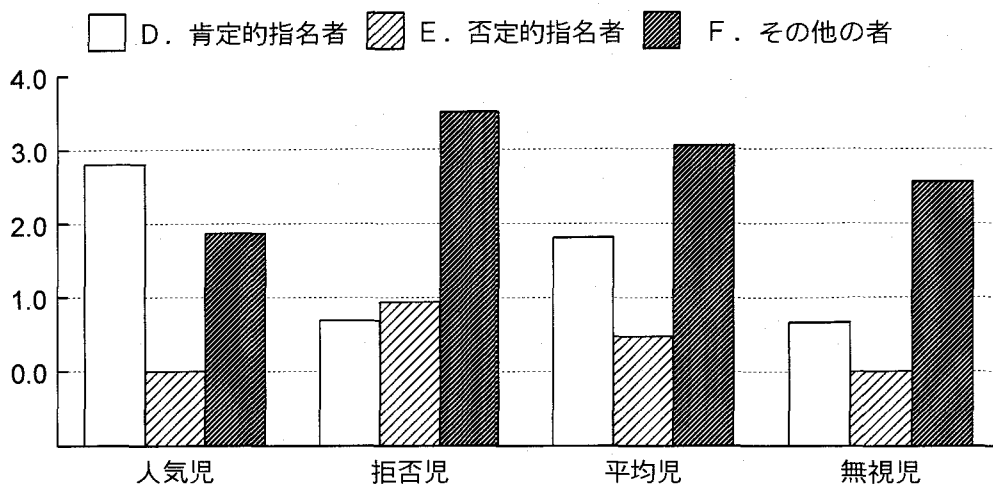


図5 DEFの仲間別の交流人数

得点では人気児と無視児の合計得点が0であり、まったく交流していなかった。拒否児と平均児の差も有意でなかった。F群との交流合計得点ではタイプの主効果が有意でなく、4タイプ間に有意差は見られなかった。

また、各地位タイプ別にDEFの3群間比較をした結果、人気児ではD群がF群よりも有意に高かった ($t=2.91, p<.02$)。E群は0であり、検定できなかったが、図4から分かるように全く交流していない。拒否児ではF群がE群とD群よりも有意に高かった (順に $t=4.35, p<.001$; $t=6.14, p<.001$)。平均児ではF群とD群がE群よりも有意に高かった (順に $t=5.61, p<.001$; $t=4.98, p<.001$)。無視児でもF群がD群よりも有意に高かった ($t=3.15, p<.02$)。なお、図4から分かるように無視児はE群と全く交流していない。

②交流人数：図5は、図4と同様にDEFの仲間群別に、対象児が自由遊び場面で交流した仲間の人数についてタイプ別の平均値を図示したものである。D群の交流人数ではタイプの主効果が $F(3, 57)=15.63, p<.001$ で有意となり、人気児が他の3タイプよりも、平均児が無視児や拒否児よりも有意に多かった (すべて $p<.01$)。E群の交流人数では人気児と無視児が0であった。拒否児と平均児の間にも有意差はなかった。F群の交流人数ではタイプの主効果が $F(3, 57)=2.75, p<.05$ で有意となり、拒否児が人気児よりも有意に多かった。

また、各地位タイプ別にDEFの3群間比較をした結果、人気児ではD群がF群よりも多い傾向にあった ($t=1.86, p<.10$)。拒否児ではF群がE群とD群よりも有意に多かった (順に $t=5.51, p<.001$; $t=7.65, p<.001$)。平均児ではF群がD群とE群よりも (順に $t=2.34, p<.05$; $t=6.00, p<.001$)、D群がE群よりも ($t=4.78, p<.001$) 有意に多かった。無視児ではF群がD群よりも有意に多かった ($t=4.86, p<.002$)。

③交流平均得点：図6は、同様にDEFの仲間群別に、対象児が仲間1人当たりと交流した平均得点についてタイプ別の平均値を図示したものである。D群との交流平均得点では平均児と人気児が拒否児よりも有意に高かった (順に $t=4.61, p<.001$; $t=4.31, p<.001$)。E群との交流平均得点では人気児と無視児が0であり、拒否児と平均児の差も有意でなかった。F群との交流平均得点では無視児が人気児よりも高い傾向にあった ($t=2.03, p<.10$)。

また、各地位タイプ別にDEFの3群間比較をした結果、人気児ではD群がF群よりも高い傾向にあった ($t=1.99, p<.10$)。拒否児ではF群がE群とD群よりも有意に高かった

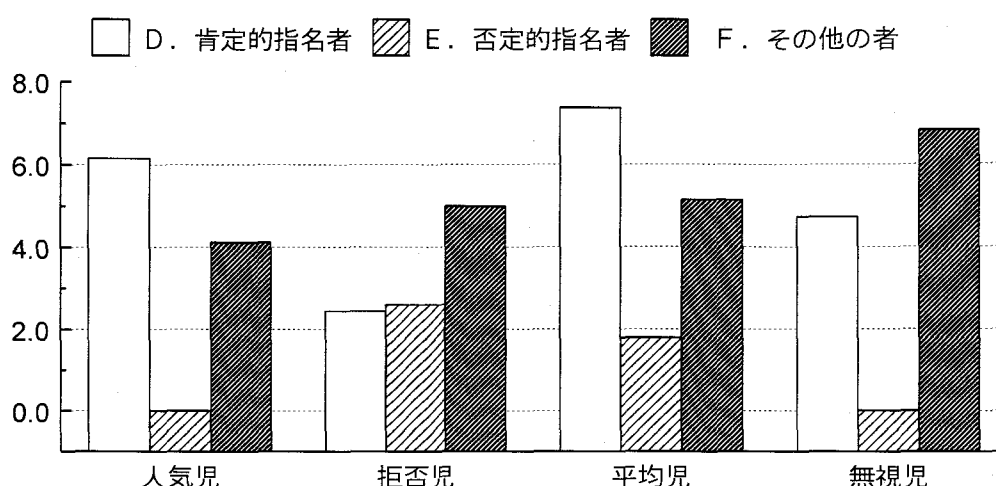


図6 DEFの仲間別の交流平均得点

(順に $t=3.34$, $p<.005$; $t=3.73$, $p<.005$)。平均児ではD群がF群とE群よりも(順に $t=2.69$, $p<.02$; $t=5.82$, $p<.001$)、F群がE群よりも($t=4.20$, $p<.001$)有意に高かった。無視児ではF群とD群の間には有意差がなかった。

相関分析の結果

表2は、対象児全員($N=63$)のデータに基づいて、ソシオメトリック指名法のL得点、D得点、SP得点、SI得点および評定法の平均評定値の5つの地位得点と仲間遊び交流の各得点との相関係数をまとめたものである。表2の(1)対象児が仲間を指名した場合を見ると、仲間から好かれ(L得点が高い)、仲間受容度が高い(平均評定値が高い)子どもほど、自分が肯定的指名で選んだ仲間と交流する関係にあることが分かる。それに対して、仲間から拒否されやすい(D得点が高い)子どもの中には、自分が肯定的指名で選んだ仲間1人当たりと交流する回数(交流平均得点)の少ない者がいるといえる($r=-.267$, $p<.05$)。他方、表2の(2)仲間が対象児を指名した場合では、仲間から好かれ(L得点が高い)、仲間受容度が高い(平均評定値が高い)子どもほど、肯定的指名で自分を指名した仲間と交流する関係が顕著である。これは、ソシオメトリック法の肯定的指名と評定法の妥当性のある程度実証するものといえる。それに対して、仲間から拒否されやすい(D得点が高い)子どもほど、肯定的指名で自分を指名した仲間と交流することが少なく、むしろ否定的指名で自分を指名した仲間と交流することが多い関係にある。

表2の相関表には示していないが、対象児全員($N=63$)のデータに基づいて交流人数と交流平均得点との相関値を求めた。その結果、肯定的指名仲間(A群)では $r=.560$, $p<.001$, 否定的指名仲間(B群)では $r=.807$, $p<.001$, その他の仲間(C群)では $r=.197$, ns, 肯定的指名者(D群)では $r=.532$, $p<.001$, 否定的指名者(E群)では $r=.884$, $p<.001$, その他の者(F群)では $r=.247$, $p<.10$ であった。これらの結果は、肯定的指名で選んだ仲間であるか否定的指名で選んだ仲間であるかにかかわらず、多くの仲間と交流する子どもほど、仲間1人当たりの交流回数も多い関係にあることを示している。同様に、仲間が対象児を肯定的指名で選んだか否定的指名で選んだかにかかわらず、多くの仲間と交流する子どもほど、仲間1人当たりの交流回数も多い関係にあることを示している。ただし、その他の仲間

表2 ソシオメトリック得点と仲間遊び交流得点との相関係数 (男女全体 N=63)

交 流 得 点	L 得点	D 得点	SP 得点	SI 得点	平均評定値
(1)対象児が仲間を指名					
①交流合計得点					
A 肯定的指名仲間	.339**	-.184	.304*	.154	.363**
B 否定的指名仲間	.068	-.119	.108	-.050	.069
C その他の仲間	-.061	-.024	-.022	-.083	.003
合計	.193	-.171	.211+	.022	.264*
②交流人数					
A 肯定的指名仲間	.355**	-.113	.272*	.240+	.339**
B 否定的指名仲間	-.037	-.082	.026	-.117	.017
C その他の仲間	.030	-.107	.079	-.076	-.018
合計	.210+	-.176	.224+	.034	.176
③交流平均得点					
A 肯定的指名仲間	.250*	-.267*	.300*	-.016	.455***
B 否定的指名仲間	.071	-.148	.127	-.075	.083
C その他の仲間	-.100	.075	-.102	-.024	.017
合計平均値	-.082	-.027	-.032	-.108	.184
(2)仲間が対象児を指名					
①交流合計得点					
D 肯定的指名者	.569***	-.361**	.540***	.206	.463***
E 否定的指名者	-.224+	.505***	-.422***	.276*	-.458***
F その他の者	-.307*	.109	-.241+	-.196	-.104
合計	.132	-.050	.106	.081	.141
②交流人数					
D 肯定的指名者	.775***	-.376**	.668***	.395**	.490***
E 否定的指名者	-.242+	.551***	-.460***	.304*	-.516***
F その他の者	-.362**	.189	-.320*	-.171	-.239+
合計	.082	.123	-.024	.202	-.084
③交流平均得点					
D 肯定的指名者	.290*	-.264*	.322*	.027	.383**
E 否定的指名者	-.195	.498***	-.402**	.298*	-.389**
F その他の者	-.237+	-.101	-.079	-.333**	-.009
合計平均値	.054	-.269*	.187	-.213+	.355**

+ : $p < .10$ * : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

(C 群) とその他の者 (F 群) では有意な正相関を示さなかった。このことから、肯定的指名や否定的指名で選んだり選ばれたりする仲間の範囲を超えると、多数の仲間とわずかな回数ずつ接触するか、少数の仲間と頻繁に交流している可能性が示唆される。なお、交流合計得点と交流人数との相関値は A 群で $r = .862$, $p < .001$, B 群で $r = .918$, $p < .001$, C 群で $r = .841$, $p < .001$, D 群で $r = .851$, $p < .001$, E 群で $r = .957$, $p < .001$, F 群で $r = .863$, $p < .001$ で、いずれも有意な高い正相関を示した。同様に、合計交流得点と交流平均得点との相関値も A 群で $r = .789$, $p < .001$, B 群で $r = .915$, $p < .001$, C 群で $r = .569$, $p < .001$, D 群で $r = .784$, $p < .001$, E 群で $r = .907$, $p < .001$, F 群で $r = .570$, $p < .001$ で、いずれも有意な高い正相関を示した。これらの相関値の高さを考慮すると、図 1, 図 2, 図 3 の結果が、その他の仲間 (C 群) を除くと、極めて類似していることが理解できる。同様の類似性が図 4, 図 5, 図 6 の結果間にも認められる。

考 察

肯定的指名仲間 (A 群), 否定的指名仲間 (B 群), その他の仲間 (C 群) との交流を地位タイプ間で比較した結果, 地位タイプ間差が見られたのは, 否定的指名仲間との交流合計得点 (図 1) のみであった。図 1 から分かるように, 拒否児は自分が否定的指名で選んだ仲間と交流することが最も少なく, 平均児よりも有意に少ない傾向を示した。しかし, 肯定的指名仲間やその他の仲間との交流では, いずれの地位タイプ間にも有意差は見られなかった。これらの結果から, 実際の仲間遊び相互作用では地位タイプに関係なく, 自分が遊びたいとして選んだ肯定的指名仲間やその他の仲間と交流することが多いといえる。

地位タイプ別に肯定的指名仲間, 否定的指名仲間, その他の仲間のいずれと交流しているかを比較すると, 交流合計得点ではいずれの地位タイプでも, 肯定的指名仲間とその他の仲間との間に有意差がなく, ともに否定的指名仲間よりも有意に多く交流していた (図 1)。否定的指名仲間よりも肯定的指名仲間との交流が多いという結果は, Hayvren & Hymel (1984) の結果と一致する。幼児といえども, 自分が否定的指名で選んだ仲間とは実際の遊び相互作用でも交流していないといえる。幼児のソシオメトリック選択は日々変動しやすく, 信頼性に乏しいと指摘されている (Hymel, 1983)。しかし, 本研究の結果はソシオメトリック選択と実際に相互作用する相手とが一定の対応関係にあることを示し, 幼児のソシオメトリック選択が現実の仲間相互作用を反映していることを実証するものである。

ところで, 交流人数ではいずれの地位タイプの子どもも, 肯定的指名仲間よりもむしろ, その他の仲間と多く交流していた (図 2)。特に, 人気児や平均児ではその傾向が顕著であった。しかし, 交流平均得点では人気児のみがその他の仲間よりも肯定的指名仲間と多く交流する傾向にあった (図 3)。これらの結果から, 人気児は少数の肯定的指名仲間と頻繁に相互作用している可能性が示唆される。人気児は多数の仲間から肯定的指名を受けているので, 自分が肯定的指名で選んだ仲間からも指名される可能性が高い。その結果として, 人気児は肯定的指名仲間と親密な交流をしやすい有利な立場にあるのではないかと解釈される。

Greenwood, Walker, Todd, & Hops (1979) の相互作用率と比較するために, 本研究でも対象児全員 (N=63) のデータに基づいて交流合計得点の平均値を求めてみた。その結果, 肯定的指名仲間との交流では 11.35, 否定的指名仲間との交流では 1.97, その他の仲間との交流では 14.78 であった。これらの平均値が合計点に占める比率を算出すると, 肯定的指名仲間との交流は 40%, 否定的指名仲間との交流は 7%, その他の仲間との交流は 53% であった。Greenwood, Walker, Todd, & Hops (1979) では実際に相互作用していた仲間との相互作用率は 50%~66%, 肯定的指名で選んだ仲間との相互作用率は 29%~30%, ランダム選出の仲間との相互作用率は 15%~16% であった。肯定的指名で選んだ仲間との相互作用率を比較すると, 本研究 (40%) が彼らの研究 (30% 前後) よりも少し高い。他の相互作用率は直接比較できないが, 両研究結果を総合すると, 肯定的指名仲間と実際に相互作用する幼児の比率は約 30%~40% 程度であると見てよからう。

次に, 肯定的指名者 (D 群) との交流を地位タイプ間で比較した結果, 交流合計得点では無視児と拒否児が人気児や平均児よりも有意に少なかった (図 4)。同様に, 交流人数でも無視児と拒否児が人気児や平均児よりも有意に少なかった (図 5)。それに対して, 交流平均得点では拒否児が人気児や平均児よりも有意に少なかったが, 無視児は人気児や平均児と有意差

がなかった(図6)。地位タイプの分類から分かるように、無視児や拒否児は肯定的指名で仲間から指名を受けることが少ないタイプである。この事実からすると、無視児や拒否児を肯定的指名で選んだ仲間との交流合計得点や交流人数が少ないことは、ある意味では当然の結果であるといえるかもしれない。しかし、肯定的指名者の仲間1人当たりとの交流平均得点の結果(図6)を見ると、無視児は数少ない特定の肯定的指名者と比較的頻繁に相互作用しているのに対して、拒否児は特定の仲間との交流も少ないことがわかる。また、拒否児はその他の仲間との交流人数(図5)が最も多いが、その他の仲間1人当たりの交流平均得点(図6)では、人気児や平均児と有意差がなかった。これらの結果を考え合わせると、拒否児は肯定的指名者を含め、多くの仲間とかかわるが、特定の仲間と持続的な相互作用をしていないように思われる。拒否児と仲間の相互作用が一時的・断片的になりやすいのは、拒否児の攻撃的・嫌悪的な言動によるのかもしれない。残念ながら、本研究では肯定的相互作用と否定的相互作用、あるいは協調的相互作用と攻撃的相互作用などの観察カテゴリーに分けて相互作用を観察していないので、拒否児の仲間に対する行動や相互作用の性質については本研究の範囲から何も指摘できない。

地位タイプ別に肯定的指名者(D群)、否定的指名者(E群)、その他の者(F群)のいずれと交流しているかを見ると、人気児は交流合計得点、交流人数、交流平均得点のいずれにおいても、その他の仲間よりも肯定的指名者と有意に多く交流していた。それに対して、無視児と拒否児は、肯定的指名者よりもその他の仲間と多く交流していた。しかし、仲間1人当たりの交流平均得点から分かるように、無視児はその他の仲間と肯定的指名者の両方とほぼ同程度の交流を示しているのに対して、拒否児はその他の仲間との交流が肯定的指名者との交流よりも有意に多かった(図6)。これらの結果は、ソシオメトリック指名法の分類結果が実際の仲間相互作用の観察結果とかなり対応していることを示している。ただし、図4～図6から分かるように、実際の仲間相互作用ではどの地位タイプも、その他の者(F群)と交流している場合が多いことに注目しなければならない。しかし、その他の仲間との交流実態については、ソシオメトリック指名法の結果から知ることはできない。この点がソシオメトリック指名法による地位タイプから、各地位タイプの仲間相互作用の実態を予測するときの1つの限界ではないかと考えられる。

要するに、本研究の仲間相互作用の観察結果は、幼児のソシオメトリック選択が観察結果とかなり一致することを実証した。人気児が特定の肯定的指名仲間や肯定的指名者と頻繁に相互作用している事実は、人気児が良好で肯定的な仲間関係を持続的に経験し、協調的な社会的行動と良好な仲間関係との良循環を引き起こす恵まれた仲間環境にあることを示唆する。それに対して、拒否児は特定の仲間と親密で持続的な相互作用をすることが少なく、交流相手を次々に替えていかねばならない状況に置かれているように思われる。その意味で、社会的コンピテンスの発達を促す仲間との持続的な相互作用経験を最も必要としているのは、拒否児であると考えられる。

要 約

本研究では、幼稚園の年長児63名を対象にして、幼児が実際に相互作用している自由遊び場面を観察した。相互作用している仲間を次の6群に分類した。ソシオメトリック指名法の肯定

的指名で対象児を選んだ仲間（肯定的指名仲間：A 群），否定的指名で選んだ仲間（否定的指名仲間：B 群），肯定的指名でも否定的指名でも選ばなかった仲間（その他の仲間：C 群），肯定的指名で対象児を選んだ仲間（肯定的指名者：D 群），否定的指名で対象児を選んだ仲間（否定的指名者：E 群），肯定的指名でも否定的指名でも対象児を選ばなかった仲間（その他の者：F 群）。本研究の主な目的は，ソシオメトリック指名法に基づいて分類した地位タイプの中から，人気児，拒否児，無視児，平均児の 4 地位タイプを選出し，彼らの実際の仲間相互作用が ABC の 3 群間および DEF の 3 群間でどのように異なるのかを検討することであった。主な結果は次のとおりであった。

①どの地位タイプの子どもも，肯定的指名で自分が選んだ仲間と実際に相互作用することが多く，否定的指名で選んだ仲間と実際に相互作用することは少なかった。

②しかし，どの地位タイプの子どもも，ソシオメトリック指名法で選ばなかった仲間と相互作用することが多かった。

③肯定的指名で自分を選んだ仲間との相互作用では，人気児が最も多く，次いで平均児となり，無視児や拒否児が最も少なかった。

④無視児は自分を肯定的指名で選んだ少数の仲間と持続的な相互作用をする傾向にあったが，拒否児はどの仲間とも一過的で断片的な相互作用をする傾向にあった。

これらの結果から，ソシオメトリック指名法の結果と相互作用の観察結果はかなり対応していることが示唆された。

引用文献

- Bierman, K. L., Smoot, D. L., & Aumiller, K. (1993) Characteristics of aggressive-rejected, aggressive (nonrejected), and rejected (nonaggressive) boys. *Child Development*, 64, 139-151.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. (1988) Multiple sources of data on social behavior and social status in the school : A cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. (1990) Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp.17-59. New York: Cambridge University Press. 山崎晃・中澤潤監訳 (1996) 子どもと仲間の心理学 ―友だちを拒否するところ― pp.14-62. 北大路書房
- Greenwood, C. R., Walker, H. M., Todd, N. M., & Hops, H. (1979) Selecting a cost-effective screening measure for the assessment of preschool withdrawal. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 12, 639-652.
- Gresham, F. (1981) Validity of social skills measures for assessing social competence in low-status children : A multivariate investigation. *Developmental Psychology*, 17, 390-398.
- Hayvren, M., & Hymel, S. (1984) Ethical issues in sociometric testing : Impact of sociometric measures on interaction behavior. *Developmental Psychology*, 20, 844-849.
- Hughes, J. (1990) Assessment of social skills : Sociometric and behavioral approaches. In C. R. Reynolds & R. W. Kamphaus (Eds.), *Handbook of psychological and educational assessment of children: Personality, behavior, and context*. pp.423-444. New York : Guilford Press.
- Hymel, S. (1983) Preschool children's peer relations : Issues in sociometric assessment. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 237-260.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. (1985) Children with peer relationship and social skills problems : Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*. Vol. 2. pp.251-297. Greenwich : JAI Press.

- 前田健一 (1995a) 児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性、引っ込み思案および社会的コンピタンスに関する仲間知覚と自己知覚 教育心理学研究, 43, 156-166.
- 前田健一 (1995b) 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 教育心理学研究, 43, 256-265.
- 前田健一 (1998) 子どもの孤独感と行動特徴の変化に関する縦断的研究 —ソシオメトリック地位維持群と地位変動群の比較— 教育心理学研究, 46, 377-386.
- 前田健一・片岡美菜子 (1993) 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, 41, 152-160.
- McConnell, S. T., & Odom, S. L. (1986) Sociometrics : Peer-referenced measures and the assessment of social competence. In P. S. Strain, M. J. Guralnick, & H. M. Walker (Eds.), *Children's social Behavior : Development, assessment, and modification*. pp.215-284. Orlando : Academic Press.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. (1993) Children's peer relations : A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.
- Parkhurst, J. T., & Asher, S. R. (1992) Peer rejection in middle school : Subgroup differences in behavior, loneliness, and interpersonal concerns. *Developmental Psychology*, 28, 231-241.
- Patterson, C. J., Kupersmidt, J. B., & Griesler, P. C. (1990) Children's perceptions of self and of relationships with others as a function of sociometric status. *Child Development*, 61, 1335-1349.
- Rubin, K. H., & Coplan, R. J. (1992) Peer relationships in childhood. In M. H. Bornstein & M. E. Lamb (Eds.), *Developmental Psychology : An advanced textbook*. 3rd ed. pp.519-578. Hillsdale, NJ : Erlbaum.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属幼稚園の先生方並びに園児の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集にあたっては女子大学生の皆さんから多大な援助を受けました。ここに記して感謝の意を表します。